

【課題】

「自己効力感」を切り口とした、質的研究と量的研究です。クリティークが初めての方もいると思いますので、ガイドを示します。わかる範囲で結構ですので、クリティークしてみましょう。

助学クリティーク用紙

論文タイトル	1. 分娩介助実習における助産師学生の自己効力感を高めるための臨床指導者の教育の実践 (出典:日本助産学会誌, Vol.39, No.1, 102-111, 2025)	2. 助産学生の臨地実習自己効力感の関連要因 (出典:母性生, Vol.6, No.4, 545-553, 2021)
1. 緒言 ・研究の背景は明確か ・研究の目的は明確か	女性の社会進出・晩婚化・少子化・ハイリスク妊娠の増加など、助産師教育の必要性を支える社会的背景が明確に示されており、社会的背景の提示が適切である。 さらに、助産師教育の制度的根拠、厚生労働省の「卒業時到達目標」を引用し、助産師学生が求められる能力の高さを論理的に説明している。 分娩介助実習で学生の心理的負担が具体的に示されており、研究の必要性が伝わる。 自己効力感の重要性を先行研究で裏付けがされており、研究の中心概念の妥当性も示されている。 一方で、「臨床指導者の教育」が曖昧であり、自己効力感のどの側面を扱うか不明である。さらに、分娩介助実習の段階が不明であり(初回?複数回?)学生の経験段階によって自己効力感は大きく異なるため、研究の焦点が曖昧になる可能性がある。	看護教育制度(指定規則・カリキュラム改正)を根拠にした導入で、研究の社会的背景が明確である。助産教育の臨地実習が重要であることを、制度・先行研究の両面から論理的に説明している。自己効力感が学習意欲や実習遂行に関係するという教育心理学的根拠が示されている。助産学生の不安やストレスに関する先行研究を引用し、分娩介助実習の困難性と自己効力感の重要性を結びつけている。 最後に「自己効力感の関連要因を明らかにする」という研究目的が明確に提示されている。 一方で、文章構成が散漫で、論理の流れが弱い。看護教育制度 → 助産教育 → 実習のストレス → 自己効力感 → 先行研究と話題が次々に移り、研究目的に向けた一貫した流れが弱い。 また、先行研究の紹介が「羅列」になっており、何が分かっていて、何が分かっていないのかが明確でない。自己効力感の一般的説明はあるが、助産学生の臨地実習における自己効力感が何を指すのかが明確でない。そのため、研究目的に至る論理が弱い。

2. 方法 ・用語の定義は明確か ・対象/標本はふさわしいか ・研究を行った場の特徴が述べられているか ・測定指標は適切に選択されているか ・データ収集の方法は明確か ・分析方法の概略は述べられているか	(助産師学生の) 自己効力感: 分娩介助実習で助産師学生が自分にもできると思えること 臨床指導者の実践内容を深く理解するには質的研究として半構造化面接は、指導者の経験・価値観・判断を引き出すのに適している。しかし、「質的記述的研究」と「KJ法」の組み合わせの整合性が弱い。 質的記述的研究は「記述」を重視、KJ法は「発想法」であり、構造化・統合に重点を置くため、研究デザインと分析方法の整合性がやや不明確である。 研究目的が「実践を明らかにする」であるため、記述的内容が中心になるはずだが、KJ法は抽象化が強いため、実践の具体性が失われる可能性がある。	(臨地実習) 自己効力感: 真鍋らの定義を用い、看護行為を行う過程で看護方法について「実践できそうだ」という自信 臨地実習: 分娩介助を行う実習 対象者が150名と十分なサンプル数であり、量的研究として妥当。 また、複数の養成機関(9校)からデータ収集しており、一定の多様性が確保されている。信頼性・妥当性が確認された尺度(自己効力感・看護実践能力・STAI)を使用しており、測定の質が高い。 統計手法(Spearman, Kruskal-Wallis, Mann-Whitney)が目的に合致しており、分析の妥当性が高い。 一方で、対象地域が関東甲信越に限定されている点は、全国の助産学生を代表しているとは言えない。 自己効力感・看護実践能力ともに自己評価であり、客観的評価(OSCE、教員評価)がない点は大きな限界と言えよう。 また、「臨地実習自己効力感尺度」は看護基礎教育向けであり、尺度は「看護臨地実習」用という点で、助産固有の技術(分娩介助・産婦ケア)を十分に反映していない可能性がある。そのため、助産学生の自己効力感を測るには、助産領域に特化した尺度が望ましい。 「看護実践能力」「不安」「属性」が自己効力感に影響するとしているが、理論的根拠が十分に説明されていない。Banduraの自己効力感理論との整合性が弱い。 実習前の自己効力感だけでは、実習による変化や実習中の要因を
--	---	---

		捉えられないため、実習前後の比較が必要なのではないか。
3. 倫理的配慮 ・対象に研究参加への十分な説明がなされているか ・対象から研究への同意が得られているか ・対象者が身体的、心理的危険、圧迫から保護されているか ・対象が特定できない配慮がなされているか ・倫理委員会の承認を得ているか	研究参加の自由意志や倫理審査の承認など、基本的な要件は満たしている。一方で、匿名化・データ管理・オンライン面接のセキュリティ・研究者と参加者の関係性・選定バイアスへの配慮など、質的研究において重要な倫理的要素が十分に記述されていない。研究の信頼性と参加者保護を強化するためには、これらの点を明確にする必要がある。	倫理審査委員会の承認番号を明記しており、研究の正当性が担保されている。特に学生を対象とする場合、学業成績・単位取得に影響しないことの明記は必須であり、学生の不利益回避が適切に示されている。 一方で、質問紙の返信=同意という扱いを現在はいししない。学生が断りにくい構造が生じる可能性があるため、任意性の強調、教員が関与しない説明などが記述されていない。
4. 結果 ・結果の内容は研究課題・方法と一致しているか ・分析は適切か ・結果の示し方は適切か ・結果の解釈に考察が混在していないか ・図表の表し方は適切か	自己効力感の理論(Bandura)と整合しており、教育的妥当性が高い。指導者の信念まで抽出されており、質的研究として深みがある。8つの最終表札が円環的構造として整理され、教育モデルとして理解しやすい。 一方で、抽出された実践は、自己効力感に特化したものというより「一般的に良い指導」になっている部分がある。学生側のデータがなく、自己効力感が実際に高まったかは不明。「産婦との関係構築」が自己効力感とどう結びつくかの説明が弱い。 改善するなら、学生の視点(自己効力感の変化)を追加すると、結果の妥当性が高まる。自己効力感との関連を明確化し、一般的指導との違いを示す必要がある。質的研究データなので、一般化は求めないにしても、KJ法に加えて、内容分析などの補強的分析があると再現性が高まると考える。	回収率 57.3%、有効回答率 93%は質問紙調査として妥当。対象背景からサンプルの特徴が把握しやすい。 Cronbach α がすべて 0.93 以上で、信頼性が非常に高い。得点範囲・平均・SD が明確で、サンプルの傾向が把握しやすい。 自己評価尺度のみであり、過大・過小評価の可能性もある。また、「臨地実習自己効力感尺度」は看護臨地実習用であり、助産固有の技術(分娩介助)を十分に反映していない可能性がある。 相関分析では、看護実践能力と自己効力感の正の相関は理論的に妥当。不安と自己効力感の負の相関も心理学的に整合している。結果は一貫しており、分析の信頼性が高い。 相関は因果を示さないため、「看護実践能力が高いから自己効力感が高い」とは言えない。自己効力感と不安の相関は妥当だが、助産実習特有の不安(分娩介助への恐怖など)を測定していない。 群間比較では年齢、教育課程、看

		護師経験、産科経験など、複数の背景要因を比較しており、分析の幅が広い。ただし、すべて「有意差なし」であり、群間比較の意義が弱い（説明力が低い）。群の構成が不均衡（例：5 年一貫校が 7.5%）で、統計的検出力が不足している可能性があるのではないか。
5. 考察 ・得られた結果の考察か ・結果の解釈は妥当か ・この研究結果との比較検討は十分か ・次の研究課題の示唆があるか ・研究結果の限界が述べられているか	抽出された 8 つの実践は、助産教育の現場で再現可能な具体的な行動レベルで示されている。指導者の「信念」まで描かれており、行動の背景にある価値観が明らかになっている。結果を円環的構造として整理し、教育モデルとして応用可能な形に昇華している点、自己効力感の理論（Bandura）と整合しており、理論的妥当性が高い。 一方で、結果の再説明に留まる部分が多く、自己効力感との関連の深掘りや批判的検討が不足しており、質的研究としての解釈の深まりに課題がある。 限界は事実として適切に記述されているが、研究の妥当性にどのような影響を与えるのかの説明が弱く、選定バイアス・分析方法の限界・学生側データの欠如など、質的研究として重要な限界が十分に示されていない。	結果と先行研究を丁寧に照合している。看護実践能力との関連、不安との関連について、既存研究を引用しながら解釈しており、論理的である。不安が自己効力感を低下させるという心理学的知見と整合。STAI の結果を適切に解釈し、臨地実習前の不安の高さが自己効力感に影響することを論理的に説明している。 一方で、考察が「結果の説明」に終始し、理論的な深掘りが弱い。Bandura の自己効力感理論（遂行経験・代理経験・言語的説得・情動喚起）との照合がない。「なぜその関連が生じるのか」という理論的説明が不足している。 教育背景の説明が長く、研究目的との関連が弱い。さらに、助産教育制度の説明が詳細すぎて、「自己効力感の関連要因」という研究目的から逸れている。考察で触れるべき重要な限界が抜けている。 群間比較（年齢・教育課程・経験）の「有意差なし」への解釈が浅く、「差がなかった」理由を十分に検討していない。特に教育課程の違いが自己効力感に影響しない理由は、理論的に説明する必要がある。 看護師経験が自己効力感に影響しない理由の解釈が推測に留まる。「助産診断の専門性が高いから経験が活かさない」という説明は一理

		あるが、データに基づく検証がないため、やや飛躍がある。 Bandura の自己効力感理論と照合し、関連要因を理論的に説明し、助産領域特有の不安や実習特性を踏まえた解釈を追加すると考察の深まりがある。また、群間比較で差が出なかった理由を、教育制度・経験の質の観点から考察する。
6. 結論 ・目的に対して解を端的に示しているか	結論は研究目的と大筋で一致し、臨床指導者の教育実践を明らかにするという目的は達成されている。しかし、自己効力感との因果的関連の深掘りや学生側の視点がないため、「自己効力感を高めるため」という目的の核心部分は十分に検証されていない。	2 点に要約しており、簡潔で読みやすい。看護実践能力と自己効力感の正の関連、不安と自己効力感の負の関連という、主要な統計結果を正しく反映している。研究目的の中心である「自己効力感に影響する主要な要因（看護実践能力・不安）」を正しく示しており、目的との整合性は高い。一方で、関連がなかった要因（年齢・教育課程・経験）への言及や教育的示唆が不足しており、目的の全体像を十分に反映しているとは言い難い。
7. 要旨	目的・方法・結果・結論が明確に記述されており、構成が整っている。結果が具体的で、臨床指導者の教育実践が 8 つに整理されている点は読み手にとって理解しやすい。「円環的構造」「指導者の信念が全体に影響」など、研究の特徴が簡潔に示されている。助産教育の実践に直結する内容で、応用可能性が高い。 一方で、「自己効力感を高めるための実践」よりも「一般的に良い指導」の説明が多く、自己効力感との関連が“理論の当てはめ”に留まり、独自の解釈が弱いため、新規性が弱い。	主要な関連要因を明確に示しており、目的との整合性がある。関連がなかった要因も示している。 一方で、影響しなかった要因への言及や教育的示唆、理論的意味づけが不足しており、目的の全体像を十分に反映しているとは言い難い。
8. 表題 ・研究の内容を端的に表している	対象（助産師学生） 場面（分娩介助実習）	臨地実習は自己効力感が大きく変化する場面であり、研究テーマとし

るか	中心概念(自己効力感) 介入者(臨床指導者) 目的(自己効力感を高める) これらがタイトルに含まれており、「教育改善につながる実践研究」であることが一目で分かる。特に、分娩介助実習は自己効力感が大きく揺れやすく、臨床指導者の関わりは自己効力感の主要因であり、研究テーマとして妥当性が高い。	て妥当と考える。 助産教育・臨床教育の質向上に直結するテーマで、社会的意義が高い研究の方向性としては妥当である 一方、“何を・どこまで・どのように”扱うのかが曖昧で、研究目的や方法が読み手に十分伝わらない可能性があるタイトルである。 「関連要因」というキーワードから量的研究を想像するが、抽象的で、心理的要因、教育的要因、学生の特性、実習環境、指導者の関わりなど、どれを扱うのかがタイトルから読み取れない。
9. 論文の全体を通して ・構成の検討は十分か ・用語の不一致はないか ・表記上のルールは守られているか ・研究用語の使い方は適切か ・その研究の意義は何か ・緒言、方法、考察で文献が十分に活用されているか ・他の文献からの活用は適切か ・適切な表記方法はとられているか		